（土曜日――夜の部）

メッセージ　9

## 一人の新しい人の感覚の中で、召会生活を実行し、同じ事を語り、一つの働きを行なう

聖書：コロサイ 3:10-11．4:7-17

**Ⅰ．コロサイ第 4 章 7 節から 17 節には、一人の新しい人の啓示と一人の新しい人の感覚との実例があります：**

Ａ．コロサイの聖徒たちも、パウロも、彼と共にいた人たちも、実際的に一人の新しい人の肢体であり、一人の新しい人の感覚を持っていました。

Ｂ．パウロが自分の手紙を読むようにと言った言葉は、ラオデキヤに在る召会とコロサイに在る召会の間に、何の違いもなかったことを証明します。彼の言葉は、交わり、一、調和、親密な接触を暗示します――16 節。

Ｃ．国籍、種族、階級の違いがあったにもかかわらず、地上には実際的に、イエス・キリストの中で創造された一人の新しい人がいました。さまざまな都市に地方召会があっただけではなく、真に実際的に一人の新しい人がいました。

Ｄ．「どの地方の召会も、他の召会から孤立することは恥ずべきことです。……これは新しい人の感覚と完全に相反します。そのような態度を保持するどの召会も、自己の感覚を持つだけであって、新しい人全体の感覚を持っていません。この態度を固持する人たちは、新しい人をばらばらにし、粉砕します。……この態度を持っている人たちは、一人の新しい人の意識、感覚に欠けています」（コロサイ人への手紙ライフスタディ（2）、第 31 編）。

**Ⅱ．さまざまな国のすべての地方召会は一人の新しい人です。こういうわけで、彼らは新しい人の感覚の中で召会生活を実行する必要があります――エペソ 2:15, 21-22：**

Ａ．すべての召会は単に個々の地方召会ではなく、一人の新しい人です――コロサイ 3:10-11．4:15-16：

１．わたしたちは、それぞれの地方召会が新しい人であると言うことはできません。そうではなく、地上のすべての地方召会が一人の新しい人です。

２．一人の新しい人は、単に個々の地方や個々の召会の事柄ではなく、団体的に地上のすべての召会の事柄です。

Ｂ．一人の新しい人が完全に出現したとき、わたしたちは諸召会の間の違いについて語りませんし、地方召会の行政区域や自治についても語りません――Ⅰコリント 1:2．4:17．啓 2:1, 7 前半．22:16 前半：

１．その時、わたしたちはみなキリストをわたしたちのパースンとし、キリストを生きています。こうして、キリストだけがわたしたちの間におり、キリストだけが現されます――ピリピ 1:20-21 前半。

２．もしわたしたちがキリストをわたしたちのパースンまた命とするなら、自然にわたしたちすべては同じ事を語り、実行上わたしたちは一人の新しい人となります。

C．諸地方召会は一人の新しい人ですから、わたしたちは自分の地方召会の中である事柄を決定する際に、全地の諸召会を考慮する必要があります――啓 22:16 前半．Ⅰテサロニケ 2:14．ローマ 16:4．Ⅱコリント 11:28。

D．諸召会は神聖な命において前進し、最終的にはみな完全に同じになるまでになります――啓 1:4, 11-12．Ⅰコリント 4:17．7:17．14:33 後半：

1．「わたしたちは自分たちの高ぶりのゆえに、他の諸召会と同じでありたくないかもしれません。しかし、神聖なエコノミーによれば、わたしたちは同じであればあるほど、ますます栄光なのです。他の人たちに倣い、他の人たちに従い、霊の中で他の人たちと一であることは栄光です。わたしたちは、互いに学び、互いに調整され、互いから恵みを受けなければなりません」（神聖なエコノミー、第 14 章）。

2．「わたしは、すべての地方召会が同じように見える日が来ることを本当に期待しており、そしてその日が来る時、主が戻って来られると信じます」（ウイットネス・リー全集、1975-1976 年、第 2 巻（下）、「召会――その霊の複写」、第 3 編）。

E．ここ主の回復の中にあるものは、キリスト以外の何ものでもありません。このキリストはすべてであり、すべての中におられます。このビジョンはわたしたちを、キリスト以外のすべてのものから救い出します――コロサイ 1:18 後半．3:10-11。

F．主は、全世界の彼の信者たちを起き上がらせ、ご自身を尋ね求めさせようとしています。そしてわたしたちが彼を尋ね求めるとき、彼が求めているのは、一人の新しい人が諸地方召会で表現されることであるのを、わたしたちは見るでしょう――ピリピ 3:7-16．エペソ 4:24。

**Ⅲ．宇宙的な一人の新しい人としての召会のために、わたしたちはみな語る事柄において、キリストをわたしたちのパースンとする必要があります。わたしたちは、エペソ第 2 章 15 節の「一人の新しい人」を、ローマ第 15 章 6 節の「一つの口」と、Ⅰコリント第 1 章 10 節の「同じ事を語り」と合わせて考える必要があります：**

A．一人の新しい人には、同じ事を語るための一つの口を持つ一つのパースンがあります――ローマ 15:6．Ⅰコリント 1:10。

B．ただ一人の新しい人がいるだけであり、一人の新しい人には、ただ一つのパースンがあるだけですから、一人の新しい人は、一つの口で語り、同じ事を語ります。

C．過去、あまりにも多くの口があったのは、あまりにも多くのパースンがあったからです。

D．「一つ思いをもって」と「一つの口で」（ローマ 15:6）は、わたしたちは数が多くても、またすべての人が語っていても、みな「同じ事を語」る（Ⅰコリント 1:10）ことを意味します：

1．召会は、キリストというただ一つのパースンを持つ一人の新しい人であり、このパースンがわたしたちの語ることを支配します。こういうわけで、何であれ彼が語る事は、必ず「同じ事」です。

2．わたしたちは語ろうとする時、基本的な問題を解決する必要があります。語るというこの事柄において、わたしがパースンとなっているのでしょうか、それともキリストがパースンとなっているのでしょうか？

３．わたしたちが語ることにおいて、自分自身をパースンとせず、キリストにパースンとなっていただくなら、一つの口があり、すべての人が同じ事を語ります。

Ｅ．一人の新しい人の中にはただ一つのパースンがあり、ただこのパースンだけが語る自由を持っています。主イエスには、語る絶対的な自由があります。わたしたちの天然の人には、語る自由が絶対にありません――マタイ 17:5。

Ｆ．わたしたちは数が多く、多くの場所から来ていますが、みな一つの口を持っており、みな同じ事を語ります。これは、わたしたちみなが一人の新しい人であり、ただ一つのパースンを持っているからです――エペソ 2:15．4:22-24．3:17 前半．ローマ 15:6．Ｉコリント 1:10。

Ｇ．もしわたしたちがキリストをわたしたちのパースン、またわたしたちの命とするなら、みな自然に同じ事を語るようになります。そのとき、わたしたちは実際と実行において一人の新しい人です。

**Ⅳ．主の回復にはいくつもの働きがあるべきではありません。すべての地域のすべての同労者は、唯一のからだのために、すなわち、宇宙的な一人の新しい人のために同じ一つの働きを行なうべきです――コロサイ 4:11．Ｉコリント 15:58．16:10．ピリピ 2:30：**

Ａ．「わたしは、わたしたちが主の御前で、わたしたちの現状をよく考えることを望みます。わたしたちは回復のために、同じ一つの働きを行なっているでしょうか？もしそうでないなら、わたしたちは主に自由を与えて、わたしたちを調整していただくべきです」（長老訓練、第 11 巻：長老職と神の定められた道（3）、第 12 章）。

Ｂ．「主の回復における主の行動には、異なる働きがあるべきではなく、ただ一つの働きだけがあるべきです。わたしたちの状況は、これとは異なっています。わたしたちは無意識のうちに異なる働きを持っています。これは危険です」（長老訓練、第 11 巻：長老職と神の定められた道（3）、第 12 章）。

Ｃ．わたしたちは神と共に働く神の同労者として、ただ一つの働き、すなわち主の働きを行なうべきです――Ⅱコリント 6:1 前半．Ｉコリント 3:9 前半．15:58．16:10：

１．パウロとペテロは異なる地域で働いていましたが、二つの働きを遂行したのではありません。そうではなく、彼らはただ一つの働きを持っていました。働きの地域によって、諸召会を分裂させるべきではありません。

２．働きに関して、新約には地理的な地域の考えはありません。地域的な味わいを持つことは、聖書的ではありません。なぜなら、キリストのからだのすべての肢体は、同じ味わいを持つべきであるからです。

Ｄ．「あなたはどこにいても、何を行なっても、神の永遠のエコノミーの中心、実際、目標を建造しており、それが新エルサレムに到達するという確信を持たなければなりません」（聖書における神聖な啓示の高嶺にしたがった生活を生きる実行的な道、第 6 章）。

Ｅ．「今日、神はこの地上で別の人、すなわち新しい人を持ちたいのです。……主は地上で一人の新しい人を得たいのです。……ですから、わたしたちはみな立ち上がって、キリストをわたしたちの団体的なパースンとする必要があります。わたしたちがある決定をし、ある種の生活をしたいなら、自分だけで決定することはできません。そうではなく、わたしたちは新しい人の中で、新しい人と共に、キリストをわ

たしたちのパースンとしなければなりません。この要求は大きくて高いのです。このようにして新しい人は成長し、円熟して、わたしたちは一人の完全に成長した人に到達します」（ウイットネス・リー全集、1977 年、第 3 巻（下）、「一つからだ、一つ霊、一人の新しい人」、第 6 編）。

F．これは究極的な召会生活となります。すなわち、キリストをパースンとし、キリストを生かし出している宇宙的な新しい人です。これはこの時代を終わらせ、王国をもたらし、主の再来をもたらします――エペソ 4:24．ピリピ 1:20-21 前半．啓 11:15。

務めの書物からの抜粋：

新しい人には一つの口だけがある

からだは互いに肢体である事柄ですが、新しい人にとって、その要求は、からだが要求する以上のものです。長年わたしはローマ人への手紙第 15 章 6 節を読んできました。それはこう言います、「それは、あなたがたが一つ思いをもって、一つの口で、……神……に栄光を帰すためです」。わたしは、自分はこの言葉を理解していないと感じていました。どうして、これほど多くのクリスチャンが共に集まって、一つの口だけを持つことができるのでしょうか？　わたしはその当時、それを理解していませんでした。しかしながら、ある日わたしは、召会が一人の新しい人であることを見ました。人にはいくつの口があるでしょうか？　一つです。わたしたちはみな互いに肢体であるだけでなく、みな一つの口で語ります。あなたは、わたしたちがどれほど多くのことを要求されているか、わかるでしょうか？　互いに肢体であることですでに十分に制限されているのに、今わたしたちが語る時でさえ、みな一つの口を持たなければなりません。これはわたしの言葉ではありません。それはパウロの言葉です。一人の新しい人には、いくつの口があるのでしょうか？

一つです。それでは、その口はだれでしょうか？　キリストが口であると言うなら、あなたはあまりにも超越しています。この事柄を解決するために、ただ一つのパースンを持つ一人の新しい人だけがいることを、あなたは見なければなりません。体全体には一つの口があるだけですが、だれがこの口を制御するのでしょうか？　口を制御するのはそのパースンです。

召会は単にからだであるだけでなく、一人の新しい人でもあります。からだは命としてのキリストを必要としますが、新しい人はパースンとしてのキリストを必要とします。あなたが語りたいとき、わたしが語りたいとき、わたしたちのだれかが語りたいとき、わたしたちは基本的な事柄を解決しなければなりません。すなわち、ここで語っているパースンはだれでしょうか？　あなたがパースンであるなら、あなた自身の口を持ちます。わたしがパースンであるなら、わたし自身の口を持ちます。こうして、あなたはあなたの口を持ち、わたしはわたしの口を持ちます。ですから、二つの口があります。各自が個々にパースンであり、各自が自分の事柄を語るとき、わたしたちは多くの口を持ちます。これは社会や宗派であり、今日の堕落したキリスト教の状態です。しかしながら、主の回復の中で、召会はからだであり、召会は一人の新しい人です。からだは命としてのキリストを持ち、新しい人はパースンとしてのキリストを持ちます。あなたが語るとき、パースンはあなたではありません。わたしが語るとき、パースンはわたしではありません。だれかが語るとき、キリストがパースンです。その結果は何でしょうか？　その結果は、ただ一つの口があるということです。

こういうわけで、コリント人への第一の手紙第 1 章 10 節でパウロは、みな「同じ事を語り」と言うのです。この節は何年も前、わたしを大いに悩ませました。わたしは、「どのようにしてすべてのクリスチャンが、同じ事を語ることができるのか？」と考えました。わたしにとってこれは不可能に見えましたが、ある日わたしは理解しました。召会は、キリストというただ一つのパースンを持つ一人の新しい人であり、このパースンがわたしたちの語ることを支配します。こういうわけで、何であれ彼が語る事は、必ずわたしたちがみな新しい人として語る「同じ事」です。

今日のキリスト教の多くの伝道者や牧師は、みな彼ら自身のパースンであり、みな彼ら自身の口を持って、みな彼ら自身の事を語っています。ですから、彼らは多くの口を持ち、それぞれ別の事を語っています。しかしながら、召会はこのようではありません。召会は、キリストをパースンとする一人の新しい人です。兄弟姉妹が何かを語ろうとしているときはいつも、自分をパースンとしません。そうではなく、彼らはキリストにパースンとなっていただきます。あなたが語るとき、キリストにあなたのパースンとなっていただき、わたしが語るとき、キリストにわたしのパースンとなっていただきます。最終的に、すべての人が同じ事を語ります。

聖書を考えてください。旧約と新約は六十六巻の書を含んでおり、四十人以上の異なる著者によって、多くの場所で、1500 年から 1600 年の期間にわたって書かれました。最初の書である創世記は、B.C.1500 年ごろに書かれ、最後の書である啓示録は、A.D.90 年以後に書かれました。彼らはみな一つの口を持っているでしょうか？　彼らはみな同じ事を語っているでしょうか？　全聖書は、長い期間にわたって多くの異なる場所で多くの異なる人によって書かれたのですが、一つの口を持ち、同じ事を語っています。今やあなたは、一つの口を持ち、同じ事を語ることが何を意味するのか、理解することができます。東洋で、西洋で、アメリカ合衆国で、ドイツで、英国で、日本で、韓国で、多くの人が語ることができますが、すべての人は一つの口を持ち、一つの事を語ります。わたしたちは数が多く、多くの場所から来ていても、みな一つの口を持っており、みな同じ事を語ります。これは、わたしたちがみな一人の新しい人であり、ただ一つのパースンを持っているからです。

親愛なる兄弟姉妹、わたしがここであなたがたと交わってきたことは、わたしが知っていることです。多くの時わたしは語りたかったのですが、内側を調べて、「語りたいのはわたしなのか、それとも主なのか？」と自らに問いました。言い換えれば、語るという事柄において、主がパースンとなっているのでしょうか、それともわたしがパースンとなっているのでしょうか？　もしそれがわたしであるなら、問題があるでしょう。それが主であるなら、問題はありません。わたしが主にパースンとなっていただくなら、彼が語る方です。そして二か月後、あなたが主にパースンとなっていただくなら、あなたはわたしが語ったのと同じ事を語るでしょう。わたしたちは一つの口を持ち、同じ事を語ります。

あなたは今日のキリスト教の中であわれな状況を見ます。なぜなら、あらゆる宣べ伝える者が自分自身の事を語ることを願い、他の人が語った事を語るのは恥と考えるからです。こうして、あなたはあなたの事を語り、彼は彼の事を語ります。時には、ある人は他の人が語った事を引用しますが、こっそり行ないます。これは実はアメリカで起こったのです。十五年前、主の回復がアメリカ合衆国に来る前、人の霊や造り変えについてほとんどだれ

も語りませんでしたが、今やこれらは一般的な用語になりました。またある人たちは、わたしたちの材料を使ってローマ人への手紙を研究し、研究を終わった後、それを印刷して、自分たちの研究を通して彼ら自身がこれらの事を見いだしたと言いました。これは正しくありません。

しかしながら、人が盲目的に他の人に従うという別の状態があります。わたしはあなたが語ることは何でも語り、あなたはわたしが語ることは何でも語ります。このようにして、わたしたちはみな一つの口だけをもって、同じ事を語ることをすべての人に見せます。あなたはいずれの場合も、そのような状態は正しくないことを見なければなりません。わたしたちは、キリスト教の状態を望みませんし、盲目的に人に従う状態も望みません。わたしたちは、一人の新しい人が語る状態を望んでいます。ただ一人の新しい人がいるだけであり、一人の新しい人には、ただ一つのパースンがあるだけですから、一人の新しい人は、一つの口で語り、同じ事を語ります。

新しい人の中には自分の事を語る自由はない

新しい人の中には、あなた自身の事を語る自由はありません。これは、互いに肢体であることよりも制限され、抑制されています。すべての人は、あなたを最も制限するのは語る事柄であることを知っています。わたしがこれやあれ、何でも言いたいことが言えないなら、大いに抑制されていますが、何でも言いたいことが言えるなら、とても自由です。しかしながら、召会の中で、キリストのからだの中で、特に新しい人の中で、あなたの天然の人にもわたしの天然の人にも語る自由はありません。これは、わたしたち自身がパースンではないからです。一人の新しい人の中にはただ一つのパースンがおられます。ただこのパースンだけが語る自由を持っており、わたしたちの天然の人には語る自由が絶対にありません。主には語る絶対的な自由があり、わたしには語る自由が絶対にありません。わたしたちは天然の人に語らせることはできません。絶対にそうさせてはなりません。一つのパースンだけが語るべきです。

あなたはローマ人への手紙第 15 章 6 節の「一つの口」と、コリント人への第一の手紙第 1 章 10 節の「同じ事を語り」を、エペソ人への手紙第 2 章 15 節の「一人の新しい人」と共に考えなければなりません。そうでないと、初めの二つの節は決してわからないでしょう。あなたは、どうして召会全体が一つの口だけを持つことができ、無数の肢体が同じ事を語ることができるのかと思うでしょう。人から言えば、これは絶対に不可能です。しかしながら、わたしたちはローマ人への手紙第 15 章で、パウロが地方召会について語っていることを見なければなりません。地方召会には、ただ一つの口だけがなければなりません。ここ台北にも、ただ一つの口があるべきです。東南アジアの諸召会にも、ただ一つの口があるべきです。これは、ただ一つのパースンがいるからです。過去、あまりにも多くの口があったのは、あまりにも多くのパースンがあったからです。多くのパースンがいるとき、多くの考えがあります。多くの考えがあるとき、多くの意見があります。しかし主に感謝します、今ここに一つの口と一つのパースンがあります。ここには警官はいません。わたしたち各自は絶対に自由ですが、もう一方で、あなたの内側に別のパースンがいるので、あなたには絶対に自由はありません。あなたは何かを語ろうとしますが、何かが内側からあなたを「つねり」、何も言わないようにと告げます。あなたが言うことができ

るのはただ、「主に感謝します！」だけです。あなたが再び語りたくなるとき、主が再びあなたをつねるので、わたしはあなたに告げますが、あなたはただ、「アーメン！」と言います。もし主がこの人やあの人をつねらなければ、兄弟姉妹は共に集まるとき、必ず言い争いがあるでしょう。

台北に在る召会には多くの人がいますが、言い争いはありません。その理由は長年、彼らが恵みを受け、キリストを彼らのパースンとしてきたからです。語っているのは、わたしではなく、あなたでもなく、彼でもなく、兄弟たちでもなく、姉妹たちでもありません。そうではなく、あらゆる人が、「主よ、あなたが語ってください！」と言います。

わたしたちが語らない理由は、わたしたちの口は生まれつき半人前であるからであると思ってはなりません。そうではなく、わたしたちは生まれた時から、口八丁のように思われます。しかしながら、何年も前、わたしが若かったころ、その綿密な計算をしました。人となったのはわたしが決めたことではありませんが、人であるなら、わたしはクリスチャンでなければなりません。クリスチャンになろうとするなら、わたしは聖書にしたがった人でなければなりません。聖書にしたがって生きようとするなら、わたしは「鎖でつながれる」でしょう。ですから、危機が迫った多くの時、わたしは何も語りませんでした。なぜでしょうか？　わたしの中にいるパースンが語らなかったからです。パースンはわたしではなく、キリストです。わたしたちはキリストを、わたしたちの命とするだけでなく、わたしたちのパースンともするべきです。わたしたちは彼の豊富を食べ、それらを取り入れて、わたしたちの存在の中へと吸収すべきであるだけではありません。わたしたちはまた、彼にわたしたちのパースンとなっていただくべきです。

新しい人の中で共にキリストをパースンとする

あなたが世界中のキリスト教を訪れても、「キリストをパースンとする」という句を聞くことはないでしょう。しかしながら、召会は新しい人であるので、この事柄は本当に聖書にあるのです。今日、この新しい人はパースンを必要とします。このパースンとはだれでしょうか？　それはキリストご自身です。わたしたちはどのようにしてこのことを知るのでしょうか？　それは、エペソ人への手紙第 3 章 17 節が、「キリストが、……あなたがたの心の中に、ご自身のホームを造ることができますように」と言っているからです。キリストがわたしたちの心の中にご自身のホームを造りたいのであれば、これは、彼がそこでパースンになりたいことを意味するのではないでしょうか？　あなたはある家に住んでそこをあなたの住まいとするとき、その家のパースンとなります。エペソ人への手紙は、他の書よりもはっきりと、わたしたちはキリストに、わたしたちの心の中にご自身のホームを造っていただかなければならないと言っています。これは、彼がわたしたちの中でパースンとなりたいからです。

しかしながら、これは、彼があなたのパースンとしてあなたの中におり、わたしのパースンとしてわたしの中におり、他の人のパースンとしてその人の中にいることを意味するのではありません。これは正しくない理解です。わたしは、彼が一つのパースンとして、わたしたちすべての中におられると言います。あなたの中のパースンは、わたしの中にいるパースンです。わたしたちはみな、ただ一つのパースンを持っています。このパースンはだれでしょうか？　このパースンはキリストです。

兄弟姉妹、この時代の終わりに、主が戻って来ることができる前に、わたしたちはからだと新しい人を見なければなりません。聖書の終わりに来ると、啓示録第 22 章で、その霊と花嫁が現れます。最後に、新しい人は花嫁です。召会が経験するキリストは、確かにこの段階にまで到達しなければなりません。最初にそれはからだであり、次にそれは新しい人であり、最後にそれは花嫁です。キリスト教の中のある人たちが言っているように、信者たちは一つの場所に集められて、主は彼らを即座に彼の花嫁に変えるというのではありません。そうではなく、今日、わたしたちは恵みを受け、からだを見て、新しい人を見て、最後に花嫁を見なければなりません。

からだは行動のためであり、新しい人は生活のためである

からだについてのわたしたちの認識が足りず、新しい人についてのわたしたちの認識が十分でなく、また花嫁についてのわたしたちの認識があまりに限られているために、わたしたちはまだビジョンの最高点に到達していません。それでもやはりわたしは、わたしたちがからだと新しい人に関して何かを見ることができることを望みます。からだは命の事柄であり、新しい人はパースンの事柄です。からだは行動のためであり、活動のための手段です。ですから、主イエスがユダヤ人信者と異邦人信者を神に和解させられたのは、一つからだの中ででした。この和解はからだの事柄です。過去わたしたちは、あなたは救われた時、神に和解させられ、わたしは救われた時、神に和解させられたと思っていました。言い換えれば、わたしたちは個々に救われ、個々に神に和解させられたと思っていました。これは誤った観念です。わたしたちは、神から遠く離れ、分離されていたわたしたちが、個人的にではなく団体の手段の中で、神に和解させられたことを見なければなりません。この手段とは何でしょうか？　この手段はキリストのからだです。一つからだの中で、ユダヤ人信者と異邦人信者は神に和解させられました。これは、からだがキリストによって用いられた手段であることを見せています。

わたしたちは行動するとき、体の中で行動します。例えば、わたしが今日、階段を下りた時、体の中でそのことを行ないました。わたしが今あなたに語っているとき、体の中でそのことを行なっています。わたしが体の中にいないなら、わたしには語る方法がありません。わたしのすべての行動は、体の中にあります。わたしの体は、さまざまな行動を取るための手段です。召会が福音を宣べ伝えるとき、これは行動です。この行動はからだの中にあり、からだによって成し遂げられます。わたしたちの体は、行動するための手段です。わたしたちの命は増し加わって成長し、わたしたちの体が健康で十分に強くなって、わたしたちが行動するための必要を満たす必要があります。

それでは、新しい人についてはどうでしょうか？　新しい人は行動するためではありません。新しい人は決定するためであり、生活のためです。人としてあなたは全く行動しなくても、やはり生活しなければなりません。からだは行動するためであり、新しい人は生活するためです。新しい人に関して、エペソ人への手紙第 4 章 24 節は、それは義と聖の中で、神にしたがって創造されたと言います。義と聖は、わたしたちの生活の条件です。ですから、生活は完全に新しい人の事柄です。新しい人は生活するためであり、わたしたちの生活の八割から九割は決定をすることにあります。ですから、あなたは二つの事を見ることができます。すなわち、からだとしての召会は行動するためであり、新しい人とし

ての召会は決定をすることによって生活するためです。一方で、召会はキリストのからだであって、わたしたちはキリストをわたしたちの命として行動し、働き、責任を担います。もう一方で、召会は新しい人であって、わたしたちはキリストをわたしたちのパースンとして、計画を立て、どのように生活すべきかを決定します。からだであっても新しい人であっても、働くことや行動することにおいても、また生活することや決定することにおいても、すべては団体的であって、何も個人的ではありません。あなたは、今日のあなたの生活が新しい人の生活、団体の生活であり、あなたの決定が団体の決定であって、あなた個人の決定ではないことを見なければなりません。例えば、あなたが工場を始めるべきか、それとも教育者になるべきか決心して、結論を下そうとしているとします。ここにある種の生活があります。あなたが新しい人の一部分であることを見ているなら、そのパースンとしてのあなただけで決定したくないでしょう。あなたは、新しい人の他のすべての部分と共に、キリストをあなたのパースンとすることを願うでしょう。この時、あなたはあなたの人の生活に関して決定しようとする場合、あなた自身をあなたのパースンとしないでしょう。そうではなく、あなたは新しい人の中でキリストをあなたのパースンとして決定するでしょう。あなたがキリストをあなたのパースンとすることによって生活するとき、あなたの生活は新しい人の生活となります。

新しい人の生活には二つの特徴があります。一つは義であり、もう一つは聖です。義は神の道にしたがっており、聖は神の性質にしたがっています。あなたの生活のすべての事が、大なり小なり、その性質において神の性質と全く同じであり、その道において神の道と全く同じであるとき、聖と義があります。しかしながら、このような生活は、キリスト教で言われている個人的な聖別の生活ではありません。むしろ、ここで言われているこのような生活は、あなたが新しい人の中でパースンとしてのキリストによって生活することであり、彼があなたの中ですべての決定をする方であるということです。こうして、生かし出されるものは何であれ義と聖です。これは、わたしたちの行動や働きとは関係ありません。それは生活とだけ関係があります。これが新しい人の面です。他の面は、からだです。からだとして、わたしたちは行動します。キリストはわたしたちのかしらであるので、わたしたちは動きます。そして、わたしたちの行動はわたしたち自身の強さやわたしたち自身の命に基づくのではなく、わたしたちの命と強さとしてのキリストに基づきます。さらに、わたしたちの行動は個人としての行動ではありません。

これら二つの事柄は、わたしたちが個人主義的にはなり得ないことを見せています。わたしたちは団体のからだであり、団体の新しい人であることを見なければなりません。わたしたちの生活は団体的であり、わたしたちの行動は団体的です。わたしたちの行動では、キリストをわたしたちの命とし、わたしたちの生活では、キリストをわたしたちのパースンとします。からだの中で、キリストはわたしたちの命であり、新しい人の中で、キリストはわたしたちのパースンです。からだの中で、わたしたちは互いに肢体であり、新しい人の中で、わたしたちはみな一つの口を持って同じ事を語ります。これが召会です（一つからだ、一つ霊、一人の新しい人、第 5 章）。